

極低出生体重児に対する早期介入 — 1歳からの早期介入の経験 —

(分担研究：ハイリスク児の発達支援(早期介入)システムに関する研究)

分担研究者：前川喜平

研究協力者：川上義¹⁾、今泉岳雄¹⁾

共同研究者：斉藤和恵、畑山伊佐枝、唐田順子、中島やよひ、横山恵子、
秋山美奈子、小野華子、菱山恵美子、八木沼れい子

要約：極低出生体重児を対象に児の発達促進、親の育児不安の解消を目的に早期介入を行なった。当初は集団での遊びは年少児には難しいと考え2歳児を対象に行なった。しかし、より育児不安の強い早期からの開催を希望する親の意見が強く、1歳からの会を試行した。この結果、親子が一緒になって楽しく遊び、極低出生体重児をもつ親どうしが話合う機会ができ、1歳前半では子供どうしの遊びは十分にできないが早期からの「親子で遊び・交流する会」を開催する意義は大きいと考えられた。

見出し語：極低出生体重児、早期介入、育児不安、育児支援

目的：極低出生体重児では脳性麻痺・精神遅滞などの Major handicap がない例でも乳幼児期に発達の遅滞を示す例は稀でなく、児の発達遅滞が両親に不安を与え不安定な親子関係の原因の一つになることが危惧される。このため児の発達を促進し、良好な親子関係を築く目的で極低出生体重児を対象とした早期介入の必要性が唱えられている。

この目的で我々は1993年より2歳になった極低出生体重児を対象に早期介入の会を開催してきた。その経験を踏まえた上で更に年少児からの早期介入の会の可能性と問題点につき検討したので報告する。

結果：(2歳からの早期介入の経験)

1993年9月より2歳になった9名の極低出生体重児を対象に、上述の目的のため月に1回「キラキラ星の会」を開始した。子供の集団の中での遊びや関わりが重要と考えたため2歳からの開始とした。

スタッフは医師、未熟児室看護婦、臨床心理士、保母など10名で、対象児も固定したメンバーで2年間行なった。プログラムの内容は場に慣れるための自由遊びの後に、インストラクターの指導のもとに親子が体を使った遊びや課題遊び(例えば、指先の巧緻性を高めるための粘り遊び等)を行ない、その合間にスタッフと親、親どうしが心配事などを話し合う形で行なった。

その結果、①9名の参加者で開始したが、母親の病気や次の児の出産などのため、2年間最後まで参加できたのは5例であった。

②参加する児を最初に固定し2年間継続したため、参加者が一部の児に限定されてしまった。

③参加者の発達経過を新版K式発達検査で評価したところ、言語・社会面での伸びが大きかった。

④親の感想として、「育児や発達に関しての不安が同じ極低出生体重児をもつ親どうしでの話や、スタッフとの話のなかで軽減・解消できた」、「育児不安の強いもつと早期から開始して欲しかった」などの意見があった。

このように、早期介入の会が両親に高い満足度をもって受け入れられ、その効果が確認された。

(1歳からの早期介入の会)

上述の経験より、より早期からの介入が望ましいと考え、しかも一部の児に限定せずに参加希望のある極低出生体重児すべてを受け入れられるシステムを1995年9月より試行した。対象児は1歳になった極低出生体重児とし、前回と同様の方式で月に一度、「キラキラ星の会」を開催した。現在までの参加人数は32例で、3例の脳性麻痺児が含まれている。

①非修正1歳では児どうしでの遊びは難しいが、遊びの内容を工夫することにより親子が一緒になっての集団の遊びが可能であった。

②1歳になった極低出生体重児の参加を無条件に認めたため、希望者が多く会場の広さの関係で結局人数の制限をせざるをえなくなった。

③1歳児と2歳児では遊びの内容や運動量が大きく異なるため、同一プログラムの内容で行なうのは無理であった。このため年少と年長の2つのグループを作らざるをえなくなった。

④毎回新しい児が参加したり、2歳になると年長グループにクラス替えになるため、参加者が一定せず

1)日本赤十字社医療センター、Japanese Red Cross Medical Center
Tadashi Kawakami、Takeo Imaizumi

親どうしやスタッフと親の連帯感が以前の固定され2年間継続したグループに比較し弱い印象がある。

⑤1歳から開始したグループでは、以前の2歳児のクラスと比較すると身体上、育児上の不安の訴えが多かった。

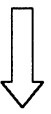
考案：極低出生体重児で出生した児では乳児期から幼児期にかけて、身体発育だけでなく、運動・言語発達も遅滞している児が多い。このため公園などで他の親子と遊んだりするのを躊躇する母親もいる。このような親の意識が児の社会的発達を遅らせ、母親の不安から親子関係を複雑にする一因となることが危惧される。このような例に対して親と子供が楽しく遊ぶ中で発達を促進し、同じ不安を抱える親どうしが話あえる機会を設定することは極低出生体重児の退院後の育児支援の一環として重要で、しかも育児不安の強い早期からの介入が望まれる。

問題点としては、健康保険の適応がないためスタッフはボランティア参加をしている点、プログラムの内容はどのように行なうのが最適なのか？、早期介入の効果をどう客観的に評価し世間にアピールするかなどの点が挙げられる。

結論：極低出生体重児を対象に「早期介入の会」を1歳から開始したが、1歳前半では児どうしの関わりあいは少ないが、親子が一緒になったの集団での遊びは可能で、育児不安の強い早期から親子が楽しく遊びながら不安や心配事を話あえる会を開催することは意義があると考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:極低出生体重児を対象に児の発達促進、親の育児不安の解消を目的に早期介入を行なった。当初は集団での遊びは年少児には難しいと考え2歳児を対象に行なった。しかし、より育児不安の強い早期からの開催を希望する親の意見が強く、1歳からの会を試行した。

この結果、親子が一緒になって楽しく遊び、極低出生体重児をもつ親どうしが話合う機会ができ、1歳前半では子供どうしの遊びは十分にできないが早期からの「親子で遊び・交流する会」を開催する意義は大きいと考えられた。